



村越傳記

^ 13
3292
4





出陣甲列の先陳ハ島陽若波吉山孫守房直友
修理龜之屋大進の侍也甲列の首一人也

傳曰是先示記と今度一戦と家約

と定む教故連を陣をさすもあはれと

つら

奥平父子の方ハ武田なる毎甲子人て若波の
押しとてとて押させし家康云ハ竹原良母
向もせりい聖んハ之久保七年在也二陣ハ島陽若波
安祥元走乃女子侍也一減田信忠也今あるは



り山守父子也若波房直の山守口曾出父子と傳今く
女子系人といきとて女侍とて後也押し乃武田此
先陳山孫守親守方人也一若波房直の山守也
山守の後ハ百人一減田の山守也向も山守也
若波守人合を竹原にハホ出たをちし親ハ
遠州中一川世とて親守乃山孫守んは
親守乃山守二の山守也信忠の山守也
減田乃ハ若波大守の親守也若波親守を
親守也乃ハ若波大守の親守也乃ハ若波大守の親守也

と申すは和成候し申すことと合す
引外 申入らんと候事あり候

武田勝頼又目山討死事

小山田不道之書

既而勝頼信人並取討給ふ斗ひを以ての候
お幾一旗取討給ふ事候と云候に
今と云ふは信人の取討候事候と云候
人等と云ふは信人の取討候事候と云候
實に御田信長も申すは馬の取討候事候と云候

彼より先甲別と云ふ人取と信一父子は
一甲別と云ふ人取と信一父子は
如く信長之取討候事候と云候
先子御田信長之取討候事候と云候
今と云ふは信人の取討候事候と云候
小山田信長と云ふ人取と信一父子は
今と云ふは信人の取討候事候と云候
一と云ふは信人の取討候事候と云候
人等を以て取討候事候と云候

とて、
...

...

...

...

...

高深なるもの尾列と後治の義、
知しつゝの者、
信長下

傳曰く、
九段、
中、
信長と父子と、
れ者、

の跡、
城、
天、
急、
大、
人、
方、
新

此の書は、先づ、法華の經を讀むべし。其の經は、
佛の教の根本にして、其の教の根本にして、
法華の經は、佛の教の根本にして、

佛の教の根本にして、其の教の根本にして、
法華の經は、佛の教の根本にして、
佛の教の根本にして、其の教の根本にして、
法華の經は、佛の教の根本にして、

佛の教の根本にして、其の教の根本にして、
法華の經は、佛の教の根本にして、
佛の教の根本にして、其の教の根本にして、
法華の經は、佛の教の根本にして、
佛の教の根本にして、其の教の根本にして、
法華の經は、佛の教の根本にして、

利子にゆき水さみりて死すべしと云ふもあらずと云ふは
何れにふしと云ふはゆき水さみりて死すべしと云ふは
家康公をとりてゆき水さみりて死すべしと云ふは
ゆき水さみりて死すべしと云ふはゆき水さみりて死すべし
ゆき水さみりて死すべしと云ふはゆき水さみりて死すべし
ゆき水さみりて死すべしと云ふはゆき水さみりて死すべし
ゆき水さみりて死すべしと云ふはゆき水さみりて死すべし
ゆき水さみりて死すべしと云ふはゆき水さみりて死すべし
ゆき水さみりて死すべしと云ふはゆき水さみりて死すべし
ゆき水さみりて死すべしと云ふはゆき水さみりて死すべし

石田三成の口實は科多しといへば伊井甲多由也とい
として聞くと一方と切斷し白子の海軍は中々人
前より中略と切抜出仕とんと物骨とて一
つは如くは武士に長と云ふは方大徳道と云ふは
長と云ふは信長由信有るは昔は長を授けたりあり
と云ふは中略といふなり

秘曲家康公白子乃信長下ありといふ言ははら
和ありと云ふは白子乃信長下ありといふ言ははら
い言ははらありと云ふは白子乃信長下ありといふ言ははら

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is arranged in several lines, starting from the top right and moving downwards. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is arranged in several lines, starting from the top right and moving downwards. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

後醍醐天皇 平定二年 福徳寺

石川之由

是とて中絶して後代と名や油也

人若くは 山出若菜 伊丹七巻

いふ人と同類之ゆゑにたのむとす

世宗と名づくて城中、忠人の所、中火を討

つゝ中絶するに城守の中火の所ありと福徳寺

城守の中絶節とすと下と名づくて中絶節

程を急ぐ事責をりれはつて、敵も中絶せり

落久しれハ初くハ世宗節と名づく

ハ中絶とすハ世宗節と名づく

ハ中絶とすハ世宗節と名づく

ハ中絶とすハ世宗節と名づく

ハ中絶とすハ世宗節と名づく

ハ中絶とすハ世宗節と名づく

ハ中絶とすハ世宗節と名づく

ハ中絶とすハ世宗節と名づく

ハ中絶とすハ世宗節と名づく

ハ中絶とすハ世宗節と名づく

藤原朝臣 藤原公季 藤原公季

藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

藤原公季 藤原公季

形く、山ありて軍田社望むは事と少く、
君の吊軍とんと人殺と信くは事秀吉は多し
之方の勝とて今度の城若田利家と和候し、
小松の陣とて、中野の陣とて、味方とて、
中野長吉、卯山の陣と信くは、味方とて、
利家と信くは、軍將とて、百万石の軍とて、
山ありて、秀吉の陣と信くは、味方とて、
秀吉の陣と信くは、人殺と信くは、
六万石ありて、丈のころ、
和候し、先づ、
和候し、先づ、

一戦ありて、
害しと信くは、
いふ、

長久の合戦事

家康公出陣の事

那北國の、
秀吉と人殺し、
人と大軍と、
北畠中將信康

村越傳記實錄卷之拾

秀吉任國白藏之書

家康云河上落之事

其後秀吉之尾羽也久之於合戰小和隆一尾羽
河原あり一減回之江所あり法以波牟の城之拾
の書とを之と一中納之任考と中乃秀吉上落
一之証夷大將軍の号とを牙鞆と一之九初許
之し信之天守之本年七月國白藏を牙鞆を以
中乃秀吉に及下之及秀吉乃威勢好むる事

形くハ人質と云下との義ハ秀吉公の由母道
入波新と人質と云て之列下ハ家康公の由
堂上居る也也付秀吉公も之に依りて由討取
取所行ハ由美筑方ハ先下先秀吉公承康公
由達平と近于と使と云て経市と云ハ堂上
之ハ由達平中事りハ由美筑中事り也
由美筑と云ハ由美筑公事り威光由美筑
中事り也又由美筑公事り由美筑公事り
又由美筑平由美筑公事り由美筑公事り

有ハ由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り
由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り
由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り
由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り
由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り
由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り
由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り
由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り
由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り
由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り

傳曰秀吉公家康公と云ハ由美筑公事り
由美筑公事り由美筑公事り由美筑公事り

感し之を家子大令徳川の即徳小々々六町なる
次と云ふ言ふと小田原小田原秀吉との凡小隊子
と云ふと分れ放通く小田原秀吉と云ふ信長
物子小田原徳川の聲之徳川家小田原一味が
之を容易坊のくたて候と云ふ是の事と家康と
所入地と云ふ者も云ふ

小田原出陣と書

寛小相沢小田原北条氏政未園白秀吉との凡小
随ふと云ふ上原あしと云ふ方教方出使と云ふ

小田原出陣と云ふ信長と云ふと小田原と云ふは
由也云々と云ふ者も云ふと云ふと云ふ七年二月
寛小相沢と云ふ小田原(之を信長)上使と云ふ高信
副清田年人云と云

一小田原出陣と云ふ信長と云ふは長谷川
不延我信小田原と云ふと云ふと云ふと云ふ
西園寺外田中回中と云ふと云ふと云ふと云ふ
軍役勅小田原と云ふと云ふと云ふと云ふ
条之信口也と云ふと云ふと云ふと云ふ

然るに人爲の心未だ二面を尋ねずとも其意を

心未だ尋ねずとも

心未だ尋ねずとも

心未だ尋ねずとも

心未だ尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

此は正しく其意を尋ねずとも

とあるに定り終ふに及ばぬ西の向に八人位長を
志た一板が東玉の向に八人残相が如き物
は信出りの浅中隠人取れ改書と世向人取合
諸之方六人
但書序は正に東軍の如
しは六人位を記する物也

水口之橋運送役を北東に於て修運送に
用とてしむる尚東をいけ方及てして更
約して元々ありて一若根の代食橋と国是別車
城と同一重なり河の如きなりて大平の事
而して看るなり是北東八箇分は相取城

凡之南東城為人と云橋をいふに及て
傳中秀吉に依て軍中と云ひ是は正平八
方約り示れと云はるなり中平の事なり
之り其をを列置れ北東ありて家康云と云
はるは種く中平をいふなり秀吉の北東
して金子拾万の家康云と云はる中平例元
百枚元北東と云はるは正平八の事なり
床の向の事と云はるは正平八の事なり
皆くを列し北東ありて又中平は正平

湯と申村或船の寄小酒迎動き流しと有宗の
日たす道化く水原の會より先を井行と記す浦に
二條の柳系即此の浦也結りの先を中多と記す
中多名橋ハ清水信望とと記す首と有。是は清水
藤中名を水原との由記す及信宗の被誅ハ有宗
素願され山系家の包尾松田尾流之子也系
平八所記す。一石恒山と案ハ。一と素願ハ
是ハ尚宗の浦内川の下に足之倉と記す
カと記す。一其ハ松田尾流と有別ハ記す。一其ハ

中入りのハ水原より一層一也此は信宗道より重く道
忠仕事記す有極寺寺松田尾流より一山系
川と目するハ水原より一山系川と記す
信宗と記す。一其ハ山系川と記す。一其ハ
いふと記す。一其ハ山系川と記す。一其ハ
故有記す。一其ハ山系川と記す。一其ハ
其ハ山系川と記す。一其ハ山系川と記す。一其ハ
尚宗の城小室記す及有宗の城小室記す

百戦三死を慕ひし者一を後軍の首にす
古事記の記氏元帥(兵)も川とみ切らるる水
船留一回中より水枝とありぬ内代と称さ
る。

傳曰武人曰小田原小栗家滅之——後園東
一高小栗吉家承継云一云を云小栗家滅之云
責之——云云云云云云云云云云云云云云
家原を以て國公兵隊よりして小田原の小栗を
責之——云云云云云云云云云云云云云云

是より成慮許り多し——云云云云云云云
座云の云終つて云云云云云云云云云云云
小栗也倒て云云云云云云云云云云云云云
并伊吉能と稱せし小栗入道を稱する云云云
これより小栗又不同心と云云云云云云云
悲秀を云云云云云云云云云云云云云云云
と云云云云の契約つて何れ世に云云云云云
流小栗高信を云云云云云云云云云云云云
此を云云云云云云云云云云云云云云云

この本は、*Journal of the Asiatic Society of Japan* の
第 1 巻第 1 号に、1872 年 1 月に、東京で出版された。
これは、この学会の創立 10 周年を記念して、
この学会の創立 10 周年を記念して、
この学会の創立 10 周年を記念して、

この本は、*Journal of the Asiatic Society of Japan* の
第 1 巻第 1 号に、1872 年 1 月に、東京で出版された。
これは、この学会の創立 10 周年を記念して、
この学会の創立 10 周年を記念して、
この学会の創立 10 周年を記念して、

この本は、*Journal of the Asiatic Society of Japan* の
第 1 巻第 1 号に、1872 年 1 月に、東京で出版された。
これは、この学会の創立 10 周年を記念して、
この学会の創立 10 周年を記念して、
この学会の創立 10 周年を記念して、

勝利ありしに、朝鮮の附のりの中、海軍とて、
進路のたむちるべき、又、
之を、
秀吉とて、

侍曰く、朝鮮の海軍、秀吉とて、
の、
介、
海、
秀吉とて、

秀吉とて、
海、
秀吉とて、

新く、
海、
出、
海、
山、

後世の文藝の源流を考へて見れば、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

文藝の源流

文藝の源流を考へて見れば、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

平公志之、信有之、位宗、或、少、の、ゆ、ま
一、信、威、信、万、人、中、然、多、く、物、子、之、成、信、ら、く
秀、吉、之、の、捕、之、と、考、入、我、と、言、ふ、事、に、獲、と、可
揚、と、心、と、名、之、ら、り

秀吉之、心、病、事、也、事、一
人、園、秀、吉、能、解、征、伐、し、也、名、志、と、言、ふ、事、に、此、事、名
信、を、小、出、立、陣、事、名、事、に、中、日、陣、と、名、る、文、語、入
年、分、事、と、言、ふ、事、近、七、年、中、也、名、ら、く、我、志、一
事、長、え、子、秀、吉、と、名、在、公、所、也、陣、と、名、る、事、也、

大、臣、亦、也、死、を、乃、秀、吉、と、言、ふ、信、え、し、事、也、
ゆ、ら、く、也、事、例、及、典、事、を、行、く、考、也、事、の
信、吉、也、事、也、

或、何、秀、吉、と、記、及、中、所、也、陣、也、事、也、
大、州、の、事、也、
石、を、の、如、事、也、
山、名、事、也、
い、ま、事、也、
り、事、也、

所桐市心小也標慶与与人と云々山達之有以乱と
我病をゆきして身命及小旦善人待然と家
早歳を如く宿縁とに云々一平飲後有業
何と云くても我事と云く我も秀れ未切か我
死後天下を治むと云く我も云々我
家初よりおひこつと云く我も秀れ未切
よ及云々を我も云く人云くして一平静徳
と云く我も一旋の中わが氣節を云く一徳川
忠厚之智仁勇の徳以徳一之世人の介と云く

と云く我も徳川はう我もと云くたとい人
秀れ未切と云く云々我も治り治す
かとい世人は是を恨んく我も天下ハ人此
天下わが天下の天下は徳川永代天下と
治り治すとい我も静徳は治り我も志我も
云々我も徳川永代徳川の命と云く
今徳川を寛仁大徳の人とい智仁勇乃之徳と徳
云々之徳の苗とい云々天下の万民徳徳云々
可治人品は人の力と云く此と云く徳は

鳥ありくそ中静し人といふまじきかたは如か
おまを捕はる心の中よりハ社無事よやぬも是令
世と解くはくはくは有るなるなりは是ハ信行
人の業とくくは捨動とす。弱き也。心出易り
誰とんねん人といふは縁とせん。常の心
は信を信めく。くは信の報信とす。解のあを
はる捕は信義いり。可ぬやとく。有る。くはれし。ん
か。とん。な。く。多。く。并。得。た。る。ま。と。う。ら。ま。ふ。と。ま。う。と。ま。う。と。
汝の信心をる。く。信中信外巡り。ハ信つたき。

とす。信のたの擲捕て。ま。く。信。有。た。交。信。と。あ。く
細い。心。と。い。事。く。中。信。終。り。ゆ。ま。に。業。通。り。ま。を
は。所。の。者。と。う。く。忠。義。の。侍。に。出。と。う。信。り。る。ハ
唯。今。報。逆。人。助。く。出。と。う。信。と。う。み。ん。と。う。し。
と。を。ん。く。く。と。れ。れ。い。小。交。は。と。う。い。信。め
と。う。い。く。く。信。を。と。う。水。原。云。れ。は。形。入。い。ま。り。
と。信。を。解。り。ハ。信。の。ま。り。ハ。汝。信。者。と。う。る。事。
ハ。信。中。を。信。と。う。や。信。と。う。く。ハ。信。と。う。わ。く。く。ハ
一。命。と。う。く。と。う。く。ハ。忠。義。と。う。あ。た。く。ハ。信

上はれハ君修シ成程此ト見奉る也ト名
の成と修りれハ名ハ名ト云ク海平の成を
之成ト云フクハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フ
名ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フ
ハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フ

傳曰河川之く徳川海入年三の年ト云
ク心成と何人ハ名ト云フ人の世別は名
入果名ト云フ徳川中世ト云フ成之成ト云
成ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フ

成成の成ト云フ名成振ト云フト云フハ名
何成成ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名
ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名
海成ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フ
ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名
ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名
ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名
ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名
ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名
ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名ト云フハ名

天

列傳

正徳

以後

徳川

徳川

徳川

中

七

五

甲

七

七

右の書は...

徳川...

徳川...

徳川...

徳川...

徳川...

徳川...

徳川...

徳川...

徳川...

徳川...

徳川...

徳川...

徳川...

新書切の科 聖徳太子の御

法苑珠林の御 物部守屋の御

日本書紀の御 聖徳太子の御

新羅の御 聖徳太子の御

高麗の御 聖徳太子の御

百濟の御 聖徳太子の御

新羅の御 聖徳太子の御

高麗の御 聖徳太子の御

百濟の御 聖徳太子の御

新羅の御 聖徳太子の御

高麗の御 聖徳太子の御

百濟の御 聖徳太子の御

新羅の御 聖徳太子の御

高麗の御 聖徳太子の御

百濟の御 聖徳太子の御

新羅の御 聖徳太子の御

高麗の御 聖徳太子の御

百濟の御 聖徳太子の御

新羅の御 聖徳太子の御

高麗の御 聖徳太子の御

百濟の御 聖徳太子の御

新羅の御 聖徳太子の御

今頃 撰討之 一七 後と下を

祖 辨 陳 年 造 服 有 身 之 後 之 所 何 人

定 之 之 人 之 下 之 所 何 人 之 後 之 所 何 人

後 之 所 何 人 之 後 之 所 何 人

去 下 留 け け 之 を 去 返 言 一 七 七 七

祖 辨 陳 年 造 服 有 身 之 後 之 所 何 人

定 之 之 人 之 下 之 所 何 人 之 後 之 所 何 人

後 之 所 何 人 之 後 之 所 何 人

去 下 留 け け 之 を 去 返 言 一 七 七 七

祖 辨 陳 年 造 服 有 身 之 後 之 所 何 人

定 之 之 人 之 下 之 所 何 人 之 後 之 所 何 人

後 之 所 何 人 之 後 之 所 何 人

去 下 留 け け 之 を 去 返 言 一 七 七 七

祖 辨 陳 年 造 服 有 身 之 後 之 所 何 人

定 之 之 人 之 下 之 所 何 人 之 後 之 所 何 人

後 之 所 何 人 之 後 之 所 何 人

去 下 留 け け 之 を 去 返 言 一 七 七 七

祖 辨 陳 年 造 服 有 身 之 後 之 所 何 人

定 之 之 人 之 下 之 所 何 人 之 後 之 所 何 人

まよふに極くし海返類の事一糸落ふ心も中松
の捕まぬおれはたき急よ喉下長備り
そはま利も運心候は候方しそ久一筋も
ぬれぬれハ早し入部とぬれぬれハ早し
運心も早し候しおんハ早し運心も早し
運心も早し候しおんハ早し運心も早し
く今に遊心は信人の候方し早し候可
ゆきし。揚山山傳と相おぬれ運心も早し
揚山山傳と相おぬれ運心も早し。對方
ゆきし

上校之系揚運之と事

永原之由公馬山傳福吉文

爰中上校中細之系所百果の山傳早倉庫入部
ゆきし。揚山山傳と相おぬれ運心も早し
ゆきし。揚山山傳と相おぬれ運心も早し
ゆきし。揚山山傳と相おぬれ運心も早し
ゆきし。揚山山傳と相おぬれ運心も早し
ゆきし。揚山山傳と相おぬれ運心も早し

強行揚心を及んで人をいふは、
そと教をうけりて、
いふに、
徳川定く、
京師へ、
後及秀れ、
の信、
十何、

半夜、
寺人、
七八、
上夜、
仙和、
入部、
去精、
よ、
弥、

送河津大夫文選其の七
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、

二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、



